

97年ブラジル・キューバの旅

組原 洋

1. ブラジルの旅

1

かつて、ブラジル研究の専門家になろうと考えたことがある。1985年頃から数年間。85年度は、1年間無給休職してブラジルに行った。その後何年か連続してブラジルに行っていた。ブラジルといっても、国境地帯に興味があって、ブラジルの辺境を、陸路で国境を越えることを繰り返しながら旅行していた。それはだいたい、開発最前線と一致していた。現に道を作っている最中の所を旅していた。その後、88年以来、サンパウロにあるマッケンジー大学の知念明教授（商法）が、同大学と沖縄の大学との交流に尽力され、それに乗る形で私も何度かブラジルに行った。が、91年を最後に、とぎれてしまった。そして段々とブラジルに関心が持たなくなっていく。

ブラジルでは、88年に新しい憲法が出来て、現在に至っているが、すごく立派というか、細かいことまでたくさん規定されている。我々が読んでもそんなにかけ離れた内容ではない。が、実際に行ってみると、共通の関心がなかなか持てないのである。簡単に言うと、それは、すごく古いタイプの社会であるせいだと思う。具体的には、金持ちと貧乏人との差が極端に大きいのである。そうすると、例えば家庭を見れば歴然とするが、中流以上の家ではたいていお手伝いさんを雇っている。雇われた人は、単に仕事できているって感じではない。身分格差みたいなものが明らかにある。だいたい、肌の色が、雇われる側はだいたい黒である。混血が進んでいるので、黒と言っても様々な濃さがあるが、とにかく白の雇われ人というのは私は見たことがないと思う。多くの日系人家庭でも雇っているが、やっぱり黒っぽい人が多い。このように、家庭の中に雇われた人がいて、その人を使える立場にあると、その家庭の子は、人を使うという経験を小さい頃から持つであろう。実際、命令するのがうまい。家庭の中に一緒に食事しない人がいても平気だし、何というか、家庭の中で雇われた人が働いていてもその人がいないかのように振る舞える。空気みたいなものなのである。そういったことが可能になるのも、圧倒的な経済格差が有ればこそであり、簡単に言えば、雇う側から見れば安価に人を雇えるわけである。

日本でこのような家庭体験を持っている人はきわめて少ないだろう。同じブラジル国民が、雇われる側と雇う側に分かれていれば、家族問題をブラジル全体で統一的には論議出来ないのではないか。法学なども、そういった古いタイプの社会擁護の手段みたいなものと考えられる。だから、法社会学的な研究は少ない。ありのままの事実が第一の関心事ではないことが痛感される。

「こんなではどうしようもないんじゃないの」と思うようになっていた。そして、貧富の差が構造的に維持されるような仕組みがなくならない限り、どんなに経済政策をいじくっても、依然として深刻な問題を抱えたままであると思っていた。簡単に言うと、国民の中に階級による分断があると、みんなが国民としての、内容的にも一致したアイデンティティを持つのは難しいのではないかと考えたのである。そうすると、金持ちはますます金持ちになっても、国民「みんな」のことなんか考えはしないであろう、と。

今回ブラジルに行くことになったのは、妻の弟がブラジル人と結婚していて、その奥さんと子どもがブラジルに住んでいるので、妻と娘を連れてそこを訪問するという全く個人的な理由からである。場所は、テイシェイラ・デ・フレイタスといって、バイア州南部の小さな町である。85年度にブラジルに行った時も、ここに3ヶ月間下宿したので、よく知っている。バイアといってもピンとこない人がほとんどだろうが、ブラジルの北東部にある。州都サルバドルは、ブラジル有数の観光都市なので知っている人もいるかもしれない。黒人が多い町である。距離的には、サンパウロからテイシェイラまでバスで22時間、サルバドルまで34時間ぐらい。バイアは後進州の1つである。ブラジルの中で北東部は開発が遅れた場所として知られている。当然社会的に古いものが残っている。テイシェイラは、まとまって日系人が住んでいる町の1つである。85年に行った当時は、日系人は多く農業に従事していて、パパイアの栽培が中心だった。妻の弟もパパイアの農場で働いていた。ブラジルの農業は大量生産で、出来たものをベルトコンベアに乗せて出荷していく所など工場かと思わせる。が、とにかく値段の上下が激しく、いったん値段が崩れると破産する人も出るのである。現在は、もうブームは去って、パパイア農場もそんなにはない。妻の弟は独立するため現在東京でタクシーの運転手をして、出稼ぎしている。彼が夏休みでブラジルに帰っている機会を利用して我々も訪問した。サンパウロから飛行機で近くのポルト・セゲーロという町に行き、そこから車でテイシェイラに行き、3泊ほどしてから、バスでサルバドルに行った。あと、飛行機でリオを経てサンパウロに戻ってきた。10日ほどで妻と娘は先に沖縄に帰った。

2

妻と娘が帰ってからも、当初はブラジルで何かするという事は考えていなかった。周辺の興味のある地域に行ってから日本に帰る、その足場としてしかブラジルは頭になかった。ところが、知念明氏から、氏の講義時間に何か話してほしいと求められ、承諾し、家族法関係の内容にすることで意見が一致した。ブラジルの家族法を頭に置いて、日本のそれを比較の形で述べるということを考えた。ちょうど矢谷通朗、カズオ・ワタナベ、二宮正人編「ブラジル開発法の諸相」（アジア経済研究所・1994年）を持ってきていて、この本は、具体的な旅行地を決めるための資料として持ってきたものであるが、この本の17章が「ブラジルの社会発展と家族関係法」（奥山恭子氏執筆）なので、これを読んだ。以下にメモを掲げる。

* 88年憲法226条「家族は社会の基礎であり、国家から特別の保護を受ける。」

「男女の安定した結合は家族団体として認められ」るものとされ（同条3項）、事実婚も家族に含まれるとした。国民の大半を占める中間層以下では、宗教婚のみ、もしくは儀式を行わない事実上の婚姻同様の生活が大半であることを考えると画期的。

夫婦共同体に関連する権利・義務は男女平等に行使される（同条5項）。

1年以上の裁判上の別居後、または2年以上の事実上の別居が証明されたあと離婚が可能（同条6項）。

家族計画は夫婦の自由な決定による。国家はこの権利行使のための教育的・科学的施策を供与する権限があるが、家族計画の公的・私的機関による強制は禁止される（同条7項）。

奥山氏の理解：3項は「社会的実態の国家による承認」であり、「ブラジルは実質的階層社

会であることを法が是認し、現状に適合する政策に転換したことになる」とされる。

ラテンアメリカ、なかんずくブラジルには「家族主義」的特質があるといわれる。それは、社会構造や政治構造とも直結している。

* 88年憲法中のその他の規定

基本的人権保障の強化

第2編「基本的権利および保障について」の中でも、第1章「個人および集団の権利と義務について」5条は77項目に及ぶ。

社会権（第2編第2章）：6条は、教育、保健、労働、余暇、安全、社会保障、母性および幼児保護、貧困者擁護を社会的権利とする。以下7～11条。

第8編「社会秩序について」：社会保険（第2節）、教育・文化・スポーツ（第3章）、科学・技術（第4章）、社会通信（第5章）、環境（第6章）、家族・児童・青年・老人（第7章、226条を含む）、原住民（第8章）について詳細な規定。

* 憲法と子ども

「適齢時に教育機会を得られなかった者に対する教育を含む、基礎的、義務的かつ無償の教育」（（208条1号）等保障。

しかし、子どもの実態は：

88年と89年にブラジルで死亡した0歳から5歳までの乳幼児は年およそ40万人。この中で、1歳未満死亡は約25万人。

89年3月から8月までの間にリオで殺された子どもの数は184人。同時期レバノン戦争で死んだ子は30人だから戦争以上。

リオにはおよそ5000人のストリート・ボーイやストリート・ガールがいると言われる。家族も、仕事も、家もない子がほとんど。社会福祉省調査では少女売春が50万人以上。彼女たちは麻薬にも冒されている。平均寿命21歳になるのは困難とされる。妊娠中絶や麻薬の故に。さらに、子どもの不法売買のため嬰兒誘拐、貧しさ故に親が子供を売る、臓器移植に利用される等の事件も多発。

90年現在、7歳から14歳までの基礎教育を受けるべき子どものうち800万人は通学していない。14歳から18歳人口のうち高校への進学率は37%（メキシコ55%、チリ70%）。

憲法規定は現実離れ。外聞のみ重視。特に国際援助を得るために世界のマスコミや世論に向けてマイナスイメージ払拭のため実効性のない法を作っているとの声はブラジル人学者からも出ている。

* 家族財産制度に関する部分：略

* 結び：文化の独自性と近代化

15世紀末以来、アメリカ大陸固有の文化とヨーロッパの文化の融合と対立の歴史が展開されてきた。北米と中南米とでは全く違う過程。北米は先進国の最たるものに、中南米は中進国とも途上国とも。

ラテンアメリカにはヨーロッパ文化流入以前の土着文化が多少とも影を落とす。ブラジルではさらに、アフリカの黒人文化の影響や大規模農園の家父長制的体質。違法・脱法の正当性、

あるいは不法の秩序ともいうべき慣行が存在。

しかし、例えば、低階層者の文化には親族間コミュニケーションが強いということは必ずしも遅れとのみ評価できないのではないか。

法による人権擁護体制確立は近代化の旗印だが、人権内容は必ずしも画一的ではない。実態に合わせた憲法の運用が必要である。

これを参考に概略次のようなレジュメを作成した。

ブラジルでの講義メモ

* 6年ぶりの訪問

バイアの親戚訪問が目的。妻と娘が一緒だった。私はこれからキューバ旅行を予定。

インフレの終息。

しかし、機械化、情報化の進展で、失業が多い。やすい外国製品もたくさん入っている。安いメキシコビール。国際化は避けられないでしょう。

同時に、乞食、とくに子供の乞食が多い。サルバドルなどひどい。

* 日本では、貧困による子供の問題はほとんどない。大体高校まではいき、大学進学も多い。

問題：不登校。援助交際。14歳少年の小学生殺人事件。いじめによる自殺等。

家族の崩壊と並行。女性労働一般化、核家族化進展、子供の数は少ない。しかし、お手伝いさん等はいない。塾に行く。

* 日本の家族法は、88年憲法以降のブラジルの家族法とそんなに違わない。

男女は完全に平等。嫡出・非嫡出子間の差別も解消の方向で改正作業が進んでいる。内縁はブラジルほど多くはないが準婚と扱われている（相続権はない）。子供の最善の利益。

* かって、イエ制度があって、国家に国民を統合する手段として利用された。

戦後も、日本の組織、とくに大企業は、家族をモデルとしてきた。企業はたんに働くだけの場所ではない。家族主義原理の日本企業。経済的に成功してきたが、閉鎖的。

国際化の進展と、家族自体の再生産が困難になりつつある。変わらざるをえないでしょう。

ブラジルでの家族主義というのは、一族経営の肥大傾向である。私的利益の主張であるから、国家全体の利益には反する可能性がある。

漢民族もこのような傾向。一生国営企業に勤めても、その企業のためにという発想にはならない。

* 今後のブラジル

階級間格差はなくしていかないと近代化できない。国民として、経済的にも社会的にも平等でないと限界がある。

今回のブラジル訪問でも、いつものことだが、まず経済状況の変化に驚かされた。かって1年間ほど無理してインフレを強制的に止めた時期に来たことはあるが、だいたいインフレが常態の国だった。来るたびに貨幣単位名が変わり、実質的に1000分の1のデノミネーションを繰り返していた。それがこの何年か安定しているのだという。現在は、貨幣単位はリアルで、ちょうど1リアルが1米ドルの感じだった。銀行で両替するより、旅行社等で両替した方が多少レートはいいが、公定レートと平行レートとの間にそんなに大きな開きはなかった。これは、

国際的な信用を得て外資導入を図るという政策と結びついていて、実際、スーパーに行ってみて驚いたのだが、外国品がたくさん置かれていた。例えば、ビールだと、私は今回初めてブラジルでメキシコ製の缶ビールが売られているのを見た。かつては外国品は非常に少なかったのである。値段も、サンパウロのスーパーで、ブラジル製の缶ビールが70円ぐらいであるのに対して、メキシコ製のものは45円ぐらいで売っていた。つまり、外国品は安いのに国産品は高い。飛行機の値段も、国内線は高く、国際線は安い。私の実感でも、ブラジルに住んでいる人たちの話を聞いても、ブラジルの物価は非常に高いと感じた。リアルが実際の値打ち以上に評価された状態で固定されているのである。最低賃金が110ドルぐらいであるから、それとの比較で考えれば歴然とする。購買力がないから、サンパウロの中心の商店街でも店を閉めているところが非常に多かった。当然、失業者や浮浪者が多い。ブラジルに行くちょっと前の97年7月21日の朝日新聞で、賃上げを求める警察官のストライキがブラジル全国に広がり、ミナスジェライス州都ベロオリゾンテでは6月末、デモの警官が軍隊や警備の警官隊と銃撃戦をやって流血騒ぎになったとのニュースが報じられている。この記事では警官の月給は2~300リアルと書かれている。また、実際に旅行してみて、サルバドルなど子どもの乞食でいっぱいである。

というわけで、いくら子どもの権利を憲法で保障してみても現実離れしている。が、日本がお手本になるような状態でないことははっきりとしている。というより、現象だけ見てみれば、似たようなものではないか。援助交際については、ずいぶん関心を持たれたようで、いろいろ質問を受けたが、正直なところ私自身もよく分からない。ただ、基本的には家族の崩壊ということと関連していると私は思う。そして、皮肉なことに、家族の崩壊は家族法の「近代化」、ないし「現代化」と並行して起こっている。つまり、家族の構成員個人個人の権利保障が、家族の絆をいい意味で強めていないのではないか、と思われるわけである。

3

こういったことと並んで、今回の旅でとりわけ記憶に残っているのは、一世の置かれている現状である。何しろ戦後50年を経たのであるから、戦後移民してきた一世もたいていもう70前後になるのである。

私は、サンパウロでは、1人の場合、いつもペンション荒木というところに泊まる。安いということもあるが、相部屋に二世とか三世とかが滞在していることが多く、その話を聞くのが楽しみである。妻と娘が帰った8月18日からここにいたが、今回は、一世の人と一緒にだった。藤澤裕(ユタカ)氏である。裕は、ヒロシと読まずにユタカと読む。ヒロヒトと同じではおそれ多いからとのことだった。

藤澤さんは70歳、息子が群馬県に出稼ぎしているが連絡がないそうだ。ナモラーダ(彼女)がブラジルで待っているのだが、困ると。氏は岩手県水沢市出身。水沢は、後藤新平、高野長英等の出身地だそうで、大変誇りに思っているそうだ。氏は、5~6年前、岩手県の招待で帰った。氏が行ったあとは希望者がいないため帰郷は途絶えているが、そういうのでは困ると。積み重ねが必要と。岩手県人会は、本人だけで1000人ぐらいだから結構大きい。

戦時は、満州に出征。もともと南方に出征の予定がシンガポールまで行ってストップし、満州に転進ということになったのだそうである。戦後台湾経由で帰ってきて、それからブラジルに来た。昭和26年6月8日テベルベルグ号でブラジルに来ている。

南米最大といわれた日系農協コチアに30年勤めた。コチアは1994年9月30日、推定9億ドルの債務をかかえて事実上倒産した。藤澤さんの話では内部分裂があったようである。協同組合は会社と違い、もうかればいいってもんじゃない、そこが面白いところですよという。現在、サンパウロの農産物公設市場（セアザ）もやっていることはやっているんだそうだが、もらい手がいないからで、いずれなくなる運命だそうである。内紛ということでは、ラジオ体操を朝リベルダーヂ駅前で行っているそうだが、この会も2つに分裂して別々にやっているんだそうである。

先だって天皇がブラジルに来たが、南半球では初めてである。皇太子時代にも何度か来ている。皇族も来た。ブラジルは特別に友好関係を持つべき国なんだとか。9月7日はブラジルの独立記念日だったが、パレードの模様を藤澤さんは、テレビで熱心に見ていた。

藤澤さんの妹さんがサンパウロにいて、夜通しNHKの衛星放送を見ているそうだ。この妹さんの息子が産科医、その嫁さんが歯科医だそうだが、息子の産科医の話では、ブラジルでは帝王切開は普通で、それは性器の筋肉がゆるまないようにということで、2回も3回もする人がいるそうである。これは事実のようである。

それから、実際に体験して大変だなと思ったのは、サンパウロでは交通量規制のため5の日は車のナンバーの最後が5だと使えないそうで、使うと罰金だそうだが、それで仕事している人は使わないわけにはいかないから、罰金稼ぎである。

ところで8月25日に、たまたま、東洋人街そばの、地下鉄リベルダーヂ駅前のベンチに座って、キューバに持っていくため買ったばかりの登山ナイフを出したら、隣に座ったおじさんが、これいくらときいてきた。3リアル、つまり300円ぐらい。これ日本？というので、見てみると、メイド・イン・チャイナである。日本ではこれ高い？ときくので、高いだろうと答える。おじさんどこときくと、沖縄出身だそう。沖縄のどこときくと、本部だそう。本部の具志堅とって、今帰仁とつながっているところだそう。ブラジルに来てもう50年以上になる。戦前に来た。来る前に八重山の離れ島に釣りに行ってそこでマラーリアにかかって、毛も全部抜けてしまった。今は頭の両脇にちゃんと毛が生えているが。大正15年生まれで74歳だそうである。仕事は薬屋だそう。昔は自分で調合して薬を売った。今は出来たものを売っただけだから誰でも出来る。昔は薬は儲かったそうだ。1937年頃2年ぐらいアメリカ、アフリカ、みんな回ったよ、と。アマゾン川からパナマ運河こえて、ロスアンジェルスに行って、そこからアメリカみんな見たよ。お金はどうしたの？あったよ、持っていたよ。2回沖縄に帰ったが、本部の家は焼けてなくなっていた。アメリカがガソリンかけて皆燃やしてしまった。さびしかったよー。墓は沖縄にあるよ。沖縄の墓は大きいよ。我々の横で話を聞いていた太っ腹のおじさんが、防空壕みたいだな、というよ、そうだよ、そうだよ。「私のおじいさんは沖縄で一番最初に明治大学に入学した。日本は体格悪いから、柔道やっても、何やっても体がついていかないから負ける。」どこに住んでるの？「サンパウロ。ここからも歩いていけるところ。」奥さんはいろいろ勉強していてあんまり家にはいないそうだ。「小さい犬だけ。かわいいよ。さびしいよ、帰っても。この回りにいる人は皆一世だよ」ふーんと思回してみると相当いる。何か、地方からツアーで出てきているのかと思ったら、そうじゃなくて、こうやってぶらぶらしているだけみたい。じゃーねとって、行ってしまったので、話を買ったばかりのノートにつけていたら、また戻ってきた。日本に、沖縄に行ってみようかという気になって、旅行社に値段をききに行ったそうである。往復1500ドルだそう。アダチという人に会いに行ったが

いなかったの帰ってきたという。アダチという人は渡慶次旅行社にいる。おじさんは安村守雄という名前。英雄の雄という字だと。おじいさんは守識（モリシキ）。お父さんは安村守蔵。お父さんの名前より先におじいさんの名前を挙げる。おじさんは、ぼけてないけど、目がよく見えないみたい。メガネ2つもってるけどよく見えないと。アパートに住んでいて、月600リアルだそう。以上。

藤澤さんの話では、リベルダージ駅周辺に一世の年寄りが集まってぶらぶらしていることはよく知られていることだそうで、問題ではないかという声もなくはないそう。老人ホームは、入居料、食費等高いそうで、それが払える人はもう入っているそうである。

このような状況では、日系社会をこれまで通りに維持していくことは困難でしょう。先に述べたコチアの倒産について、淵上英二「日系人証明—南米移民、日本への出稼ぎの構図」（新評論・1995年）は、組織内部で日本語が使われなくなったのが倒産の原因だと、一世たちは言っているのだそうである。行きすぎた同化が民族的特性を背景にした生産組織を破壊してしまう。組織が二世、三世に取って代わられると、経営者たちはブラジル語中心になってしまい、同時に彼らのメンタリティもブラジル化し、組織のために自己犠牲を惜しまない日本的思考も薄れていったのだと。ちなみに、ドイツ系やオランダ系の組織では四世、五世の代になってもドイツ語やオランダ語が使われているそうである。こうして、日系農村の主要な行事であった運動会が出来なくなっていくし、日本語学校の運営も困難になっていった。日本語学校の場合、教師が、われもわれもと日本に出稼ぎに行ってしまった。日本語が出来ない三世が日本に行って、帰ってくると四世の子どもは日本語がうまいといったことが今後起こるかもしれない。

2. キューバの旅

1

今回キューバに行くことを考えたのは、97年7月22日に東京の本屋でたまたま、樋口聡「キューバへ カリブ楽園共和国探訪記」（批評社・1996年）を見つけて買ったのだが、その直後、友人の鈴木正行氏に会い、氏からキューバのことをきいて、キューバに行けることが確認できたことに始まる。キューバは長い間、行けるならば是非行ってみたい国の1つだった。前記のように、ちょうど、ブラジルに向けて8月8日出発する予定にしていたが、妻と娘が帰ったあと、私は1人で旅行を続けるつもりだったので、ブラジルからキューバに行ってみようと考えたのである。キューバには、アメリカからは入れない。メキシコから入れることは上記の本や鈴木氏の話から分かったので、ブラジルからメキシコ経由でキューバに行くことを最初は考えていた。ところが、ブラジルのサンパウロに住んでいる友人の奥間有盟氏に、キューバに行きたいという希望を述べたら、氏は、サンパウロからキューバに週2便、直行便が飛んでいることを教えてくれたのである。こうして、ブラジルからキューバに直接入れることが分かったので、キューバ入国に必要なツーリストカードを日本で取れるなら取ってしまっておこうと思い、当たってみたところ、東京の新宿にある、MAPという旅行会社のネイチャーワールドという部門で取得代行してくれることが分かり、沖縄からFAXで依頼した。パスポートそのものは必要な

く、そのコピーを沖縄からFAXで送るだけで済んだ。ブラジルに出発する直前に上京した際、できあがったツーリストカードを受領した。手数料込みで9000円だった。

サンパウロでキューバ旅行を専門に扱っているのは、サンチャットツアー-Sanchat Tour という旅行社である。妻と娘がブラジルから日本に向けて発った翌日の8月19日にこの店に行った。飛行機のチケットだけなら往復600ドル程度で買えるようだが、事情がよく分からないのでホテルは全部セットしてしまうことにした。4つ星とか5つ星のホテルになるが、それはそれでいいんじゃないかと思った。というのは、そういうホテルでないとテレビに衛星放送が入らないだろうから。ホテル宿泊に朝・夕2食をつけ、旅程は最初の3泊がサンチャゴ・デ・クーバ、残り3泊がハバナということで、全部で1348ドルになった。

ガイドブックとしては、樋口氏の「キューバ大情報 カリブ海の穴場」(三修社)という本を持参した。1993年から96年の間に行われた取材に基づいているというから、最も新しいガイドブックだろう。このほかに、MEXICICO&CENTRAL AMERICAN HANDBOOKの96年版(Trade & Travel Publications)も持参したが、現地で読んでみて、96年版ではもう古いという感じがした。それぐらい変化が大きい。

2

8月30日(土曜日)、0時10分発のCU451便で、サンパウロからハバナに向かう。チェックインの際に、私の前に並んでいたキューバ人のおばさんから、おばさんの荷物の一部を私の荷物として預けてほしいと頼まれ、OKする。とにかくすごい荷物なのだ。このおばさんだけでなく、非常にたくさん荷物をかかえた人が多い。飛行機は小さくて、3連の座席が2つ並んでいるタイプのもの。人が座っていない座席は、動き出すとバタンと前に倒れてしまう。こんなのでちゃんと着くのかなと思う。が、何も問題なく、予定通り7時40分(サンパウロより1時間遅れ)ハバナ着。空港には、「我々は革命を信ずる」(Creemos en la Revolucion)と大きく書かれている。イミグレーションでは滞在ホテルまで細かくきく。税関は簡単。外に出て、空港の出発場所にも行ってコインロッカー等の有無を確かめたが、ないようだ。ツリスタクシーというタクシーでエリザベートさん宅に行く。16USドル。タクシーのメーターにはちゃんとUSドルと書かれている。ドルをそのまま使うということが、何か信じられなくて、実際に行ってみるまで本当かしらと思っていた。本当だった。

エリザベートさんというのは、奥間さんの知人である。彼女のお父さんは石川善俊さんといって、沖縄移民であるが、すでに亡くなった(石川さんのことは、琉球新報社編「世界のウチナンチュ2」(ひるぎ社・1986年)174頁以下参照)。奥間さんから、ハバナ大学で日本語とロシア語を教えているスサナ先生へノートやボールペンを届けるようにと頼まれたのだが、私はこれからまずサンチャゴ・デ・クーバに行くので、スサナ先生の知人であるエリザベートさんに奥間さんから預かったものを託したのである。エリザベートさんの住んでいるアパートは、ハバナ新市街のど真ん中にある。エリザベートさんのほか、息子さん(大学生)と娘さん(弁護士)もいた。こちらの予定を告げ、カフェをいただいてから、旧市街まで歩きたいというと、荷物は持たない方がいいと言われ、置かせてもらうことになる。

まず、クバーノ等航空会社が集まっている所に行く。ここで航空券を出して予約再確認を頼んだのであるが、それらしいことはやらしてもらえなかった。土曜日のせいかもしれない。出発前、サンチャットツアーで再確認の必要はないと言われていたこともあって、それで終わりに

して、海岸沿いに旧市街に向かって歩く。段々、古いという域をこえて、廃墟並みの建物が多くなってくる。実際、壊しているところも多い。土曜日のせいか、人も少ない。新市街から、セントロを経て旧市街に入り、ハバナに帰ってきたときに泊まることになっているイングラテラホテルまで行く。ここで、ジュースとサンドイッチを食べる。もちろんドル払い。トイレを使ってから歩いて戻る。店は少なく、品も少ないようである。イングラテラ内にあるドルショップも粗末だった。旧市街というのは、人がごちゃごちゃした所だろうと思っていたんだが。これは勘だが、朝がすごく遅いのかもしれない。エリザベートさんの所に着いたときも、出てくるまでにすごく時間がかかって、まだ寝ておられたようである。新市街にある、ギタール・ハバナ・リブレというハバナ最大のホテルを經由して、エリザベートさんたちのアパートの前にあるホテルカプリに戻ってきて、ここでミネラルウォーターを飲む。1ドル。とにかく体が水を要求する。エリザベートさんの所に戻ると、息子さん、エリザベートさんのほか、エリザベートさんの夫もいて、この方はクバーノのパイロットで、バルセロナなんかに行くそうです。息子さんは父親の職業を誇らしく思っている様子。水飲みますかというのでまたもらって飲んだ。いくらでも飲める。パナタクシーが安いと言って、電話でよんでくれた。これで空港まで行ったら、確かに今度はちょうど10ドルだった。

着いたところは、国内線ターミナルで、朝着いたところとは別である。出発便の案内が、テレビはもちろん、目に見える形では全然なくてやきもきさせられる。何度もインフォメーションに行って確認する。3時過ぎにCU788便のチェックインが始まり、定刻4時半に飛び立つ。50人乗りぐらいのプロペラ機。途中2度降りて、夕方7時20分頃サンチャゴ・デ・クーバに着く。サンチャットツアーでもらったバウチャーに基づいて、タクシーのお迎えあり。

サンチャゴの町は、ハバナに比べ非常にきれいに見える。途中、タクシーの運転手さんに、明日グアンタナモに行きたいと言うと、彼自身が行ってくれるといい、70ドルだという。きいたら、サンチャゴからグアンタナモへのツアー等はないようなので、お願いすることにする。宿泊するカサグランダホテルに着いてみると、新築のようで、非常にきれい。部屋も広くて、大変落ち着く。シャワーを浴びて夕食。夕食の時ビールを飲んだので、外に出ないでそのまま部屋に戻る。洗濯をしながらCNNを見てみると、ダイアナ妃が交通事故あって、負傷したと。テレビや明かりをつけたまま寝てしまって、途中目がさめると、ダイアナ妃は死んだと。テレビを消して寝る。

3

8月31日(日曜日)、7時に起きる。片づけをして、朝食。貴重品入れの鍵を借りる(3日間で6ドル)。使い方を教えてもらう。今回NECのARDATAという小さなワープロを持ってきたが、それが入る大きさなので使う気になった。ホテルのそばにある店で水とビスケットを買ってから、昨日の運転手さんと10時に会う。彼は都合が悪くなって、かわりの人を連れてきていた。ヘススさんという人。昨日の運転手を途中で降ろしてから、グアンタナモに向かう。ヘススさんは、最初は取っつきにくい感じがしたが、少しずつなじんでくると息が合うようになった。ちゃんと頭が働いていて、好奇心もあり、会話が弾んでくる。グアンタナモまで80キロほどのようだが、11時過ぎに着いた。Autopista(高速道路、無料)は制限速度が場所によって違い、80~90キロのところが多いが、そこをだいたい100~120キロぐらいで走った。中間に、細い道の部分も3分の1ぐらいある。途中、2つぐらい小さな町

があった。La Maya、 Niceto Perezと地図に出ている。道路は、自転車が多い。オートバイもかなりあり、サイドカーをつけたのが多い。バスは結構走っているが、トラックで引いたものや、トラックに人を乗せているもの等もあり様々。一般の車はとにかく古くて大きい。アメリカの50年代の車が今も現役である、というのも本当だった。ただし、タクシーは小型車が多く使われている。レンタカーらしいのを途中一度見たが、ナンバーにはturisutaと書かれていた。

グアンタナモに入ってまっすぐホテルグアンタナモに行く。ここでヘススさんはガイドをセットしたLic. Peter Hope氏(Lic というのは、学士の略)。ホープ氏の名前は、メキシコ&セントラルアメリカンハンドブック96年版442頁に載っている。12時前まで待ってから、ホープ氏を乗せて出発したが、出発までは、車に近づいてきた男の子2人と話していた。うち1人はお父さんもお母さんもおらず、お父さんは殺されたそうだが、学校には行っているようで読み書きは出来る。和辞典を見せながらいろいろ雑談したら楽しかった。しかし、何度も何度も、1ペソ、1ペソとねだるのだった。ペソは全然持っていないんだが。

ホープ氏の案内でグアンタナモ市内をざっと走ってから、基地に向かう。途中まで、バラコアBaracoaに行く道。サトウキビはまだあまり大きくない。11月頃から収穫とのことである。キューバ軍基地の入り口でホープ氏は担当者と交渉してセット完了。ここから、基地の担当者も同乗する。あとで、ホープ氏と担当者それぞれに5ドルずつ支払った。基地の中に入ってかなり行くと山道になっていく。500年になるというサボテン?を写真に撮る。キューバ基地内では写真を撮らないようにということだったが、撮りなさいというんだから。途中2カ所鍵のかかった柵を開ける。マローネス山頂に着くと、米軍基地が全部見える。もっとも、肉眼では無理。担当者が持っていた望遠鏡を借りて見てから、ホープ氏のスペイン語での解説を聞く。メモしながら話してくれたのでだいたい分かった。メモによれば、米海軍基地は、117.6平方キロメートル、7000人が居住し、うち2500人が兵士である。2つの空港があり、3つの滑走路があるが、1つは4.6キロの長さである。説明あと、私はコーラ、ホープ氏とヘススさんはビールを飲む。ちゃんと冷蔵庫があって、担当の人が出してくれた。料金は私が払う。沖縄のことはホープ氏もヘススさんも知っていて、しきりに沖縄も同じだろうと言うが、キューバが国ごとアメリカと対立関係にあり続けてきたのと比べると、沖縄の場合同じとは言えない。グアンタナモに米軍基地があるのは、周知のように1901年のプラット修正による。キューバがスペインから独立すべく武装蜂起した際に、アメリカは1898年中立国として介入し、スペインが敗れた結果、キューバは独立したものの、アメリカの海軍基地を設けるために必要な土地をアメリカに売却、または貸与することを認める条項を、起草中の憲法に挿入するようにとの要求を受諾するほかなく、このプラット修正は憲法に組み入れられた。宮本信生「カストロ」(中公新書・1996年)10~11頁によれば、アメリカは毎年2000ドルの借料を小切手でキューバ側に支払っているが、カストロ政権は抗議の意味を込めてこれを決して現金化しないのだそうである。

見学のあと、基地の入り口で担当の人を降ろし、ホープ氏をホテルグアンタナモで降ろしてから、ヘススさんは持っていた名刺を見ながら、グアンタナモ市内のカテドラルそばの家に行く。外からは普通の家だが、中は民宿になっている。ここで、まず飲み物を飲んでから昼食。カマロン(エビ)にフライドバナナとご飯。おいしかった。ヘススさんは私が残したご飯も全部食べた。あと、カフェ。全部で22ドル。民宿は10ドルで泊まれるそうである。外国人だ

からといって別に隠す様子もなく、進んで部屋を見せてくれた。最初に入った入り口の隣にもう1つ入り口があって、その奥にある部屋も見せてくれた。お客さんらしいおばあさんがベッドで横になっていた。冷房はなく扇風機。清潔。今現在でも外国人が合法的に泊まれるのかどうかよく分からない。

帰り道、雨が本格的になる。ぶっ飛ばす。5時半頃ホテルに戻ってくる。約束は70ドルだったが、途中ヘススさんはメーターを使って距離を測っていて、90ドルだと。実際、グアンタナモから基地まで相当距離があったので、こんなもんでしょう。細かいのがなかったので、100ドル札を出して、10ドルはヘススさんの妊娠中の奥さんへと行って渡したら大いに喜ばれた。ヘススさんは31歳である。

ホテルでちょっと休んでから散歩に出るつもりだったが、雨がやまないうちに暗くなってしまった。洗濯等のあと、8時半に食事してから早々に寝る。

4

9月1日(月曜日)、7時前に散歩に出る。坂をおりて海岸に出てから、迂回しながら戻ってくる。早いうちはよかったが、段々人が増えてくると、道が狭くて歩きにくい。たぶん各種公共サービス機関だと思うが、あちこちで人々が列を作って並んでいる。靴がないようにガイドブックには書かれているが、多くはきれいな靴をはいている。でも、店らしい店はないなあ。というか、店を意味する「TIENDA」という言葉がそのまま使われている。町の人とはほとんど目が合わなかった。避けている。わずかに登校途中の男の子がウインクしたのがほとんど唯一か。

ホテルに戻って朝食。10時にヘススさんの車で出発。まず、El Cobre というカトリックの寺院に行く。意外に近くてそんなに時間はかからない。ヘススさんは花束を買う。奥さんの安産を祈って真剣。有名な教会なのに、荒れた感じがする。ここで、やはりタクシーで来ている日本人に会う。そのあといったん市内に戻ってから、ヘスス氏の提案でEl Morro という要塞に行く。これも見たかった所である。その後、Cementerio Santa Ifigenia という墓地に行ってもらう。ここにホセ・マルティの墓がある。ホセ・マルティは、19世紀にスペインからの独立を戦ったキューバの英雄。ハバナの空港がホセ・マルティ国際空港という名前である。ガイドのおばさんが熱心に説明してくれた。すごい熱弁。入場料1ドル、写真撮影料1ドル。

墓地に行く前にヘススさんは彼の家に寄って、中を見せてくれた。海のそばで、すごいぼろ。トタン屋根は、雨が降ると雨漏りするそうだ。道路に面した部屋の次に寝室があり、そこに大きな冷蔵庫があるが、モーターがついていない。さらに奥が台所、それから中庭に出てさらに奥に物置等。細長い。道路に面した部屋でヘススさんの写真を撮る。隣の家にはヘススさんの母親等が住んでいて、そこでも写真を撮る。墓地に行ったあともヘススさんの親戚宅を2軒訪ね、写真を撮る。さらに、ヘススさんの奥さんは今出産の準備で別の所にいるが、そこにも行って、奥さんの写真を撮った。なかなかきれいな人だった。写真を撮るチャンスがよっぽどないようだ。現像する店はあるが、そもそもカメラが普及していないのではないか。おかげで、いろいろ生活の様子を見ることが出来て私は興味深く感じた。なお、医療はきいていたようにただだそうで、サンチャゴには4つ病院があるそうだ。普通は、いきなり病院に行くのではなく、クリニックに行くそうで、診療所のようなものでしょう。病院の1つを車から見たが立派な

ものだった。

そのあと、ホテル近く、つまり町の中心部に戻り、一緒に食事する。飲み物等の代金もいれて24ドル。アルゼンチンからの旅行者等もいてにぎやかだった。ここでタクシー代も払う。35ドルということだったが、40ドル払った。生活場面を見せてもらったお礼のつもり。お金のことはよく分からない。例えば、運転手さんと食べた店では私はドルで払ったが、キューバ人はペソで払うんでしょ。公式では、ドルとペソとは1対1だが、実勢は、1ドルで20ペソぐらいだというから、ドル払いだと、お店は20倍得することになるのだろうか。このへんどうなっているのだろうか。

レストランで別れ、1人になって、私はまず近くのMuseo Emilio Bacardi に行く。現代美術が面白い。ここの売店でサンチャゴ・デ・クーバの地図を買う。それから、地図を見ながら、ホテルサンチャゴ・デ・クーバに向かって歩いていく。ティエンダがいくつもあり、すごい繁盛ぶりである。衣類と靴が中心のようである。同じ道を帰ってきて、5時20分頃ホテルに戻る。

夜8時に食事してから、ちょっとして寝てしまった。寝る前に、テレビでカストロを見た。おじいさんになった感じ。ずっと立ってないで、すぐに座る。もう年だなあ。8月27日にマイアミにあるスペイン語系の放送局が、カストロが死亡したと伝え、中南米にネットワークを持つ一部テレビ局もこれを引用する騒ぎがあったそうで（朝日97/8/30）、私もその関係の記事を出発当日の8月30日に、サンパウロ新聞という日系の新聞で読んだ。読んでいた前記の「カストロ」を読了。よくも悪くも、カストロの国だ。

5

2日（火曜日）、荷物を整理してから、8時前に朝食。朝食後、フロントで、滞在を午後6時半までに延長する（通常のチェックアウトタイムは午後2時）。延長料12.5ドル。すごく安いと思う。いや、2時にチェックアウトしてから夕方までどうやって時間をもたせるかいろいろ考えたが、どうも外でゆっくり休めるところがなく、しかし、ここは非常に蒸し暑いところなので体力を消耗する。昼寝できるような場所がほしかったのである。

今日はまず、アントニオ・マセオの生家に行った。アントニオ・マセオという人はやはりキューバの英雄だそうで、サンチャゴ・デ・クーバ市内に大きな銅像があるので初めて知った。どんな人なのかと思って行って見たのだが、よく分からない。キーワードは、パトリア イリベルダーデ（祖国と自由）かな。

それから中心部に戻ってきて、Museo de Ambiente Historico Cubano（キューバ歴史環境博物館）に行く。昔の生活道具が並べてあり、私には興味深かった。机に、使いやすそうなものがある。皿の一部が欠けていて、首からぶら下げようになっているひげ剃り皿は面白い。

このあと、昨日とは1つ違う通りを通して、ホテルサンチャゴ・デ・クーバ方面に向かう。本屋が何軒かあり、入ってみる。法律（Derecho）のコーナーもあったが、憲法が置かれていない。店員にきいてもないそうで、びっくりする。他の実定法らしいものも見あたらない。最優先はやはり政治関係で、カストロはもちろん、ホセ・マルティ等の著作もたくさん置かれている。私のいるホテルカサグランダと、ホテルサンチャゴ・デ・クーバとのちょうど中間あたりにホテルレックスがあるが、この1階の部分がティエンダになっている。この店には、洗濯機やオーディオ機器等、電気製品も売られている。もちろん外国製品で、日本のメーカーのもの

のもある。ジュースや牛乳等はキューバ産である。見ていると、キューバ人もドルで買い物している。ちゃんと持っているんだなと確認できる。ドルのほかに兌換券も少し混じっている。兌換券はカラフルな模様なのでとても目立つ。店の周囲は見物人で人だかりである。出るときは、領収証と実際に買ったものを照合する。暑くて疲れたので、私はここでパインジュースを買って飲んでからまっすぐホテルに帰ってくる。

シャワーを浴び、ちょっと休んでからホテルのレストランで食べた。鶏肉の唐揚げを食べて12.6ドル。現金で払ったが、VISAカードを見せたら使えるそうだ。ただし、アメクス等アメリカ系のはだめである。食後、部屋に戻って、3時まで昼寝。せっかく延長したので、部屋でゆっくりすることにし、手紙を書いたり、本を読んだりする。6時過ぎにチェックアウト。ちょっと待っていると、着いたときと同じ運転手が迎えに来た。バウチャーによる。

空港に着くと、昨日 El Cobre で会った日本人に会う。佐久間純氏。彼も今晚の飛行機でハバナに行き、ホテルも同じイングラテラなので、出来れば一緒に飛行機がいいなと思い、きいてみる。彼はすでにチェックインを済ませていたが、話によると、彼のはもともと遅い便だったが、それを9時20分に搭乗し9時50分発予定のCU1471便に変更したのだそうだ。私のはCU187便で、9時発11時30分着の予定になっているが、これが今晚は遅れて、何と11時半頃発になったのだそうである。そうすると着くのは午前2時頃ということになるではないか。冗談じゃない。私も、佐久間さんと同じ便にかえられないだろうか。佐久間さんは、ここは交渉次第ですよ、と言い、彼がその交渉もやってくれた。その結果、変更は簡単に出来ちゃったのである。非常に交渉上手である。同じ列に並んでいた外国人旅行者も私と同じように変更した。めでたく同じ飛行機になったので、2階のレストランに行き、お礼に私が払うことにして、夕食を食べる。私はバウチャーでの旅をしているので、決められた通りに動かしかなければと思っていたのだが、そもそもキューバの飛行機はいい加減なんだと、佐久間氏は言う。彼もハバナから飛行機でサンチャゴに来たのだが、来るときも同じようなことがあったらしい。CU1471便というのはチャーター便なのだそうだ。おそらくヨーロッパからツアーのお客さんを乗せてやってくるのである。サンチャゴで降りしてからさらにハバナまで行く。それでか、座席指定はない。それで、いざ搭乗の段になると、押し合いへしあい大変な騒ぎである。秩序ある社会主義なんて無理じゃないの。でも、皆笑いながら押し合っている。陽気なもんだ。乗ってみると、ヨーロッパからのお客さんはほとんど降りたようで、座席は十分余裕があった。飛行機はDC10だから巨大である。3連座席が3つ並んでいる。機体にはAOMというフランスの会社名とCubanoの両方が書かれている。飛行機は、9時40分頃には飛びたった。そして、何と1時間でハバナに着いた。国際線の客を先に降りしてから、国内線ターミナル近くに行き、バスでターミナルに行く。佐久間さんは旅行社の人がお迎え。日本人女性である。私も、バウチャーに従ってCubatur の女性が出迎え。予定より早く着いてもちゃんと迎えに来ているのは、連絡が行ったのかもしれない。佐久間さんの荷物が出てくるのを待ってから、どうせ同じホテルなので、Cubatur の人には帰ってもらって、佐久間さんと一緒に行く。旅行社の人はあとで名刺をもらって知ったが、是永禮子さんである。イングラテラに着いて、部屋が決まって落ち着いたのが12時過ぎだった。古いホテルで、落ち着いた感じ。テレビはCNNは入らない。冷蔵庫もない。が、スタンドの明かりが明るいのでそれが一番嬉しい。

3日(水曜日)、7時前に起きて荷物の整理等をしてから、7時半に朝食。8時に佐久間さんが頼んだガイドさんが来た。今日は一緒に動きましようということになった。このガイドさんが何と沖縄三世。イトカズ イライドさん。

まず、タクシーで航空会社に行く。佐久間さんはメヒカーナ。私も、クバーノで予約の再確認をする。済んでから、佐久間さんが行ってみたいということで、近くのエリザベートさんのアパートに行ったが留守だった。ホテルナショナルまで歩いて行ってから、タクシーで旧市街に戻り、古い建物を順に回る。市立博物館、カテドラル、土産物屋等。一段落してから、路上の飲み物屋で休憩。Cachitoという缶入りサイダーを飲む。スプライトと同じ味。場所によってはスプライトも売っている。イトカズさんは31歳で、現在独身。あとで写真も見せてもらったのだが、お父さんは沖縄の顔。お母さんは42歳で早く亡くなり、妹さんと、お姉さん2人だそうである。Cubaturのガイドを始めて6年ぐらいだそうだが、日本人の客はあまり多くないそうだ。彼の月給はだいたい220ペソぐらいだそうで、つまりイトカズさんの月給は実勢で10ドルほどということになる。これが普通。1ドルってすごいわけである。タクシーは、ハバナで一番安いのがパナタクシーで、これが0.45/kmぐらい、ツリストタクシーが0.7/kmぐらいだということから長距離だと大きな差になる。だから、パナはなかなかつかまらないそうである。イトカズさんは、95年に研修で1週間埼玉に行ったそうである。短すぎて沖縄には行けなかったそうだ。親戚が那覇に住んでいる。滞在を延長しようとしたがだめだった。そのときの印象ではとにかく物価が高いと。そうでしょう。沖縄は本土と比べてどうですか、と質問してくる。沖縄の日本の中での状況は知っている様子である。

私は、先に述べたように、サンパウロの奥間さんからスサナ先生にノートとボールペンを持っていくよう頼まれたが、イトカズさんの妹さんがスサナ先生に日本語を教わったそうである。佐久間さんも一緒に行ってくれることになって、朝からスサナ先生に電話していたが連絡が取れない。それで、まず、ハバナのフリートレードゾーンを見に行くことになる。ちょうどパナタクシーをつかまえることが出来たので、それでハバナの東部に向かう。フリートレードゾーンが出来たことを、佐久間さんは、キューバ航空国際線機内誌SOL y SON(No 43-No 4/1997)で知ったようである(つまり、昨夜のCU1471便の機内にこの雑誌が置いてあったのである)。この雑誌によれば、キューバの自由貿易地域は法165号によるもので、97年5月5日 Wajay (ハバナ空港そば)に、同月7日ハバナにそれぞれ設けられ、6ヶ月内にさらに、MarielとCienfuegosにも設けられる予定なのだそうだ。イトカズさんが交渉してくれた結果、中に入って、担当者から話を聞くこともできたが、正直なところ、どんな活動がなされるのかよく分からない。現段階では、いくつかの建物内に箱が積まれているといった感じでしかない。規模も、今後拡張するそうだが、思ったより小さかった。

このあとさらに同じタクシーで東に向かい、ビーチに行く。たくさんの人が泳いでいたが、そのほとんどが外国人のようである。イトカズさんの話では、イタリア、スペイン、ポルトガル等からのツアーが多いそうである。空港から多分ビーチ前のホテルに直行し、あとはずっとそこにいてからまた帰るのでしょう。ホテルは高層のものではなく、せいぜい4~5階程度。今後大きなものも建てられる見込みのようである。イトカズさんは、やはり、外国人ばかりのビーチ風景に愉快ではない様子だった。

それから同じタクシーで引き返し、まっすぐハバナ大学に行く。大変立派な建物であるが、

キャンパス内に戦車が展示されているのには、さすがにびっくりした。イトカズさんが事務室できいたら、今大学は休みで、結局スサナ先生の自宅に我々が直接行くことになる。行く前に、佐久間さんが両替したい（トラベラーズチェックをドル現金にする）ということで銀行まで歩いたが、途中、大きな交差点で車と車の事故を目撃した。信号がついていなかったようだ。私がすぐにカメラを向けたら、そんなことしたら警察に引っ張られるよと佐久間さんにいさめられた。が、あとで是永さんにきいたところでは、カメラを向けても大丈夫なんだそうである。彼女は実際に撮ったことがあるのだそうである。事故はきわめて多いだろうと思われる。ルールがちゃんと確立されてない感じだし、車がまた年代物ばかりだから。

トラベラーズチェックは、パスポートをホテルに置いてきたため現金化できなかった。話ではパスポートだけでなく、身分証のようなものまで要求するようだ。ホテルイングラテラには、パスポートは持って歩くなと注意書きがあり、私も佐久間さんも持っていなかった。フリーゾーンにはいるときは、私が持っていたパスポートのコピーが役に立った。タクシーでスサナ先生宅に行く。奥間さんからのノート等はすでに、エリザベートさんから受け取ったそうである。私からは、読み終わった「カストロ」を差し上げた。「面白い本ですか」とたずねられたが、返事に窮する。どんな本がほしいのか、奥間さんからきいておくよう頼まれたのできいたら、学生用の日本語の教材だそうである。スサナ先生は、94年に国際交流資金で日本に行ったそうである。また行きたい気持ちは山々だが、チャンスが少ないようだ。タクシーを待たせていたので、コーヒーをいただき終わったところで写真を撮って、それからおいとます。

まっすぐイングラテラに戻ってくる。4時前になっていた。佐久間さんは両替。そのうち是永さんも来た。一緒にホテルでサンドイッチ等を食べる。このとき佐久間さんは是永さんへの支払を終えたが、そのあとも、佐久間さんの希望で、オートバイ工場に行くのだそうである。私は遠慮したのだが、是永さんから誘われて一緒に行くことにした。彼女はすごく元気な人である。彼女の運転で出発してちょっとして、警官から呼び止められたのだが、立派にまくし立てておとがめなしだった。相当走ってまず住宅地で奥さんと子どもを乗せる。それから、その奥さんの夫がやっている工場に行く。工場といっても、住宅に付設した、個人的な小さなものである。キューバでは、ものすごく幅の広いタイヤを使った、安定感のあるオートバイが走っている。そんなのを作っている。帰りに、是永さんは、絵がたくさん飾られているしゃれたレストランに案内してくれた。ここで、しばらく話してからホテルに戻った。もう8時前になっていた。ちょっと休んで、8時半から10時まで佐久間さんとホテルで夕食を食べる。最初はそのあとのみに行こうということだったが、眠くなったので、部屋に戻って寝た。

7

4日（木曜日）、7時半に下におりて朝食。そのあとフロントで沖縄にFAXしてもらったが通じなかった。朝食後、佐久間さんがお土産の音楽テープを買いに行くというのでつきあうことにする。行く前に、彼にFAXのことを話したら、ハバナの国際電話ナンバーは88番ときき、改めてこの番号を付加してFAXしてもらったら、ちゃんと届いた。6ドルだった。

ホテルからセントロに向かって歩いていく。するとまずスタジオみたいな所に出た。中に入る。低音の音楽がかかっている。おじさんが1人。佐久間さんがおじさんの写真を撮ると、おじさんは佐久間さんに会員証を作った。写真を送ってくれば壁にはるからね、と。すでにたくさんの写真がはられている。さらに歩いて、目指す店が見つかる。店といっても、事務所で

すね。ロッカーから取り出してくれたものは確かにカセットテープ。ほかにCDも。佐久間さんは10個で1セットのテープとCDを買う。ホテルの方に、別の道から帰ってくると、San Miguel 通りと Industria 通りが交わる所に、OKINAWAというバーがあった。びっくりして中に入ってみると、男が3~4名いたが、ちょっと見たところ沖縄の顔はない。しかし、うち1人が、日本人の血が混じっているかもしれない。名刺を出して、沖縄から来たんだよ、と言う。イングラテラに戻ったところで、入口の横のいすに腰掛けている人が日本人のように見えたので声をかけるとそうだった。どこか行きたいところがあるということなので、是永さんを紹介する。

佐久間さんは、このあと11時過ぎに出発した。メキシコ経由で日本に帰るのである。キューバはわずか4泊だそうだった。私は昨日でハバナの観光地をだいたい回った感じがしたので、今日は朝からバラデロにでも行こうかとも考えていたが、昨日是永さんに相談したところ、キューバの人の生活が見たいのならハバナにいた方がよいと言われ、もっともなのでこの意見に従った。これは結果論になるが、4日にバラデロのホテルコパカバーナで爆弾事件があり、1人が死亡した。私はサンパウロに帰ってから新聞で知ったが、8件目だそうである。これもアメリカと関わりのある反キューバ勢力の犯行と見られているようだ(朝日東京版97/9/5夕刊参照)。

佐久間さんが出発してから私は歩いて出る。いくつかの博物館に行くつもりだったが、いちいち地図を見ながら歩くのが面倒なので適当に歩いて、たまたま出てきた革命博物館に入る。入館料が3ドルと高いが、そのかわり巨大である。革命をやった国なんだな、ここは、と改めて思った。入館者もまじめに見ている。ホールで軍服の人たちが、多分研修か何かしていて、チェ・ゲバラの写真のついた印刷物を持っていた。チェ・ゲバラは、97年で没後30周年になる。ベトナムを思い起こした。革命を起こした当事者は、よくも悪くもそう簡単に過去のことにはしてしまえないだろう。売店で本を3冊買った。いずれも英語の本で、2冊はオーストラリアで出版されたもの(グアンタナモ及びマイアミへのキューバ移民関係の本)、もう1冊は、外国投資法の英訳である。こんなところで外国投資法を入手できたことを皮肉に思った。買う際に50ドル札を出したら、ドル札のナンバー、私のパスポートナンバー、滞在ホテルを控えたのには驚いた。偽札が出回っているのかもしれない。ザンビアで同じような体験をした。ここに1時頃までいてからいったんホテルに戻る。

ホテルで、スナック類の中で一番高いスーパーサンドイッチというのを食べ、それからフロントで娘からのFAXを受領した。2時半頃まで昼寝。3時頃からまた出て、教育博物館というのを探していったが見つからなかった。旧市街の道はきわめて狭い。博物館は必ずしも分かりやすい表示をしていない。博物館に行かなくても、街を歩いているだけで面白い。人々はすごく古い建物に住んでいる。観光名所や博物館と同じような建物に住んでいるわけだから。上の方を見ると鶏小屋のように人の顔が見える。昔、王侯貴族が住んでいた所に今住んでいるわけである。教会は、いくつかのぞいてみたが、やはりすさんだ感じである。教会の内壁の彫刻の上にキューバの国旗がぶら下がっているのを見た。子どもたちは元気である。車椅子に座った身体障害児も見たが、明るい表情だった。旧市街をぐるっと迂回しながら鉄道中央駅に出る。売店で Cachito を飲んで休んでから、5時ちょっと前にぎりぎり間にあって、ホセ・マルティの生家に行く。入館料1ドル、写真撮影料1ドル。ドラゴン通りを通過して戻ってくる。シャワーを浴びてちょっと休んでからまた出て、ホテルからすぐのカピトリオに行く。アメリカ

のホワイトハウスそっくりの建物で、革命前まで国会議事堂として使われていたそうである。すでに5時過ぎて中には入れなかった。カピトリオ前に本屋があるのに気づいたがもう遅すぎた。この国では本屋の閉店はすごく早いようである。あと、暗くなるまで散歩してから、ホテルに引き上げて、夕食後早くから寝た。昨日がんばりすぎて眠い。結局、キューバでは夜は全然出なかったことになる。老けたもんだ。

8

5日(金曜日)、朝4時頃起きる。荷物整理のあと、5時に下においてチェックアウト。ちょっと待っていると迎えのミニバスが来る。何か所か回った後、空港に行く。すぐにチェックイン。空港税は15ドル。中に入ると、早いのに免税店は開いていた。さすがだ。でも店員さんは皆眠そうである。予定ではCU450便は8時15分発で、サンパウロ着は22時40分となっている。行きは8時間ほどだったのに帰りは約13時間半もかかる。その理由が分かった。ウルグアイのモンテビデオ経由なのである。ハバナ、モンテビデオ、サンパウロ、ハバナという順で飛ぶわけだ。予定通り発って、9時間かかって、18時15分にモンテビデオに着いた(サンパウロと同じ時間)。予定では20時15分発だったが、30分も早く飛びたって、サンパウロに21時40分頃着陸した。しかし、なかなか到着ゲートに行かず待たされた。着くと、素早くイミグレーションを終え、空港から出て、バスに乗った。地下鉄に乗り継いで、夜11時過ぎにペンション荒木に戻ってきた。

飛行機で隣に座った人はアンゴラ人だった。飛行機関係の技術者のようである。気持ちのよい人で、住所交換した。

(1997/9/21 脱稿)